基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

３月１３日、買い出し

11時、東京つつじヶ丘のアトリエにて、4mの角材12本（寺田倉庫の展覧会で使ったもの）、はかり、ロータシーブ（回転式用土分別機）などもろもろを積んで、現場に向けて出発。途中、でかいスーパーのイートインコーナーでお弁当（天丼とうどんセット）を食べて14時半ごろ現場に到着。向かいの畑が復活していた。ネギが植えられている。前回来た時はしばらく放置されている様子だったのでほっとした。

５ヶ月ぶりに来た現場は思っていたよりも草が茂っておらず、もはや定番になりつつあった「原点回帰の草刈り」の手間が省けた。いつからか、ひとつのプロジェクトにじっくり何週間も向き合い続けるということが難しくなっている。思えば《移住を生活する》のときも、完全集中できた期間は一年だけだった。決して多くはないものの、いくつかの頼まれ仕事も抱えつつ、自主企画も進めていくような器用さが年齢とともに求められることが多くなっている印象。でも、それがよい。断片的に入る他者からの要請に応えつつ、合間に自分のことを進めるような、息を吸ってまた潜る、平泳ぎのイメージで、もっと仕事を頼まれたい。それに、星野源にくらべたら私などは全然ひまな部類だろう。星野源のことはなにもしらないけれど

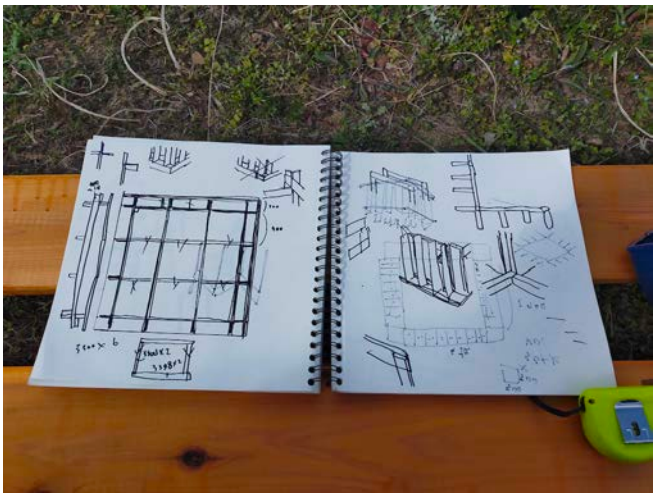
まずは発電所の復旧作業を行う（前回バッテリーの不具合で電気が使えず、裏の滝口さんのコンセントを借りるという事態になった）。ファントム（私の軽バンの名前）で使っていたバッテリー（左写真の白い箱状のもの）を使い回すことにした。バッテリー⇄チャージコントローラー⇄ソーラーパネルの順番でケーブルを繋げ、16時に作業完了。悔しいが、電気がないとなにもできない。携帯電話もパソコンもインパクトドライバーも使えない。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

今回の滞在の目標は村上勉強堂（本堂）の骨組み作りである。その制作に必要な資材を調達するため、「夕焼け小焼け」の町内放送を聞きながらパワーコメリ（超でかいホームセンター）へ向かった。近所のコメリで手に入らないものはだいたいここにある。車で25分くらいのところにあるので便利である。



木材コーナーをひたすらうろつき、ときおりスケッチブックを広げてあれこれ絵を描きながら２時間以上考えた。コメリといえば「風見鶏っていいですね～」の歌い出しで始まる店内BGMが素晴らしいので店に入るといつも期待してしまうのだが、結局この歌を聞くことはできなかった。その代わり、「いつものコメリであーんしん」というフレーズを連呼する店内CMの子供の声が脳に刻まれた。「あーんしん」の言い方が非常に特徴的で、なぜこんな発話をするのだろうという疑問に答えはでなかったが、長時間の滞在の末「エコ杉板」（厚み20，幅210，長さ1820mm）という安い板材(１枚900円)を８枚と、杉の足場材（36×210×4000mm）を４枚、40×300×300mmのコンクリート平板を40枚、それに水性の木材保護塗料３Lとローラーを１本購入した。合計38,952円。ファントムの最大積載量ギリギリである（もしかしたらアウトかもしれない）。平板は本堂の基礎に、杉材は骨組みになる。通常は横位置で使う足場板を縦方向の構造材として使うのは面白いのではないかと思って使うことにしたが、必要な枚数８にたいして在庫が４しかなかったので、足りないぶんを「エコ杉板」でまかなう計算。仮に８枚あったとしても、足場材は長い上にめちゃくちゃ重いので軽バンのルーフキャリアで運ぶのは４枚が限度だった。入荷を待つという手も考えたが、せっかくやる気になっているのに先延ばしになるのは嫌だったし、なにより安くて扱いやすそうな「エコ杉板」でできるならそれに越したことはない。

＜とつぜんのコラムコーナー＞

20時の閉店時間ぎりぎりまで、本堂をどういった構造でつくるべきか考え続けた。二時間以上立ったままの姿勢で、いわば「建築設計」をしていた。本当は机上でやるべきことなのかもしれないが、購入できる材料を店頭で随時確認しながらの設計のほうが性に合っている。なぜ自分のようなひとが他に一人もいないのかが不思議だ。みんな、あらかじめ買うべき材料はわかったうえで店に来ているように見える。数分間悩むひとはちらほら見かけたけど。

《村上勉強堂》は初めての、解体を予定していない作品である。ホームセンターでうろうろしながら、自分の死後のことも自然に考えていた。普段の作品づくりではあまり考えない長さだ。自分がいまホームセンターにいることを忘れてしまうほど意識が遠くに飛んでいった瞬間もあった。建築家も、自分の死後のことを考えながら設計するのだろうか。建築は完成したら設計者の手を離れて施主のものになってしまうので、すこし違う感覚なのかもしれないけれど、ある瞬間の自分の選択の痕跡が何十年も残り続けるという意味では同じである。自分が死んだ後、この、それなりのボリュームの物体に「残す価値がない」と判断された場合、誰が後始末をするのか。他人に処理を任せることを考えると、打設コンクリートはぜったいに使いたくない。街へ出れば、そこらじゅうの建設現場でコンクリートを流しまくっている。尋常な感覚ではない。なにか、生物としてのリミッターを解除しないとそのような選択はできない。

とはいえなんらかの基礎は必要なので、せめて産廃業者に持っていきやすいよう、コンクリート平板を基礎とすることにした。打設してしまうと人力では運び出せない。人力で解体できるかどうかが、ひとつ基準になるかもしれない。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

すっかり暗くなっている空に驚き、パワーコメリから車で10分くらいの「みきの湯」という東金市のスーパー銭湯へ行ってみた。隣がパチンコ屋の、盆踊りのやぐらみたいに派手な店だった。いささか派手すぎるのではないか。平日タオル付き入浴で1100円。カラオケも店内に併設されていて、ロビーを歩いていると、なかなかの歌声がなかなかの音量で漏れ聞こえてくる。浴室内は壁にも床にもフェイクグリーンが盛り盛り。それだけでなくディズニーランドとかにありそうな作り物の「樹木」も一本生えている。そのほか壁には一面の原生林みたいな写真。泉質は「準天然温泉」らしい。初めて聞いた。準天然。あやしい響きだ。

それほど混雑しているわけではないのに、風呂場もロビーもレストランもとにかく騒がしかった。ロビーはカラオケの歌声で、その他はテレビである。私はまず露天風呂で垂れ流されているテレビで「**とうもろこしは宇宙から来たのではないか」という説がある**（先祖がわかっていないという点と、種子が皮につつまれてしまっているので何者かが剥かないと繁殖できない点から）ことを知り、サウナのテレビで「**ゆずこしょうには胡椒が入っていない**」（発祥地である九州では唐辛子のことをコショウと呼んでいるため）という事実を知り、レストランのテレビでは**タレントのGACKTがゲーセンで「頭文字D」というレーシングゲームにはまったときに、操作が下手な自分が許せず、SEGAに電話をしてゲーセンにあるものと同じ「頭文字D」を一台自宅に運んでもらい、毎日深夜1時から4時までドリフトの練習をしていた**という断片的な知識を得た。

驚いたのはレストランで、モニターではなくプロジェクターを使ってテレビを流していた。二つの壁面に横幅２m以上の画面が４つ。音量も大きい。すごい…すごい圧だ。バラエティ番組なので、たえず誰かがせわしなく喋っている様子が４つの画面から同時に迫ってくる。なにか社会主義国家的な、ビッグブラザーみたいな存在すら感じさせる空間だ。

久しぶりにテレビ番組を見て、昔のように番組タイトルが最初にバンっと表示されないのが新鮮だった。現代のテレビはもう番組名などの情報が画面上に表示されるので必要ないということだろうか。番組ロゴという「象徴」が不要なものとされ、タレントのトークなどの「中身」だけが並んでいる。かつて番組ロゴをデザインしていたひとたちは元気で生きているだろうか。それと、Youtubeみたいに放送の途中でも小さな広告枠が画面の右上などに表示されるのも新鮮。しかし中身は変わっていない。20年前の再放送と言われても違和感がない。出演者たちは放送中、何十回と大笑いしていたが、私の口元はぴくりとも動かなかった。ちょっとおもしろげなことを発言したらみなで笑うべき人間と、発言の直後に司会者がいじることによってようやく笑うタイミングが来る（とされる）人間があらかじめ分けられている。人間の選別が行われている。まだこんなことを続けているのかと驚いてしまう。「オチ」がない話には価値がないとされている。子供の頃、クラスメイトとの会話で、この「オチ」という存在に苦しめられた記憶が蘇る。企画として進歩がない。おもしろさの射程がせますぎる。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

←タッチパネルで表示されていた生姜焼き定食の画像と、提供された本体。
電脳空間に生姜焼き定食が浮かんでいる。

22時すぎに「みきの湯」を出て、これから現場に帰ってコンクリート平板40枚を車からおろすことを考えるとつらいものがあるなあ、それは肉体的な辛さではなく、綺麗な体で汚れ作業をすることの嫌さだろう、と考えつつルーフキャリアーに詰んだ足場材が荷崩れしないよう慎重に運転し、黙々と40枚の平板をおろし、車内に寝床を確保。

３月１４日、基礎づくり

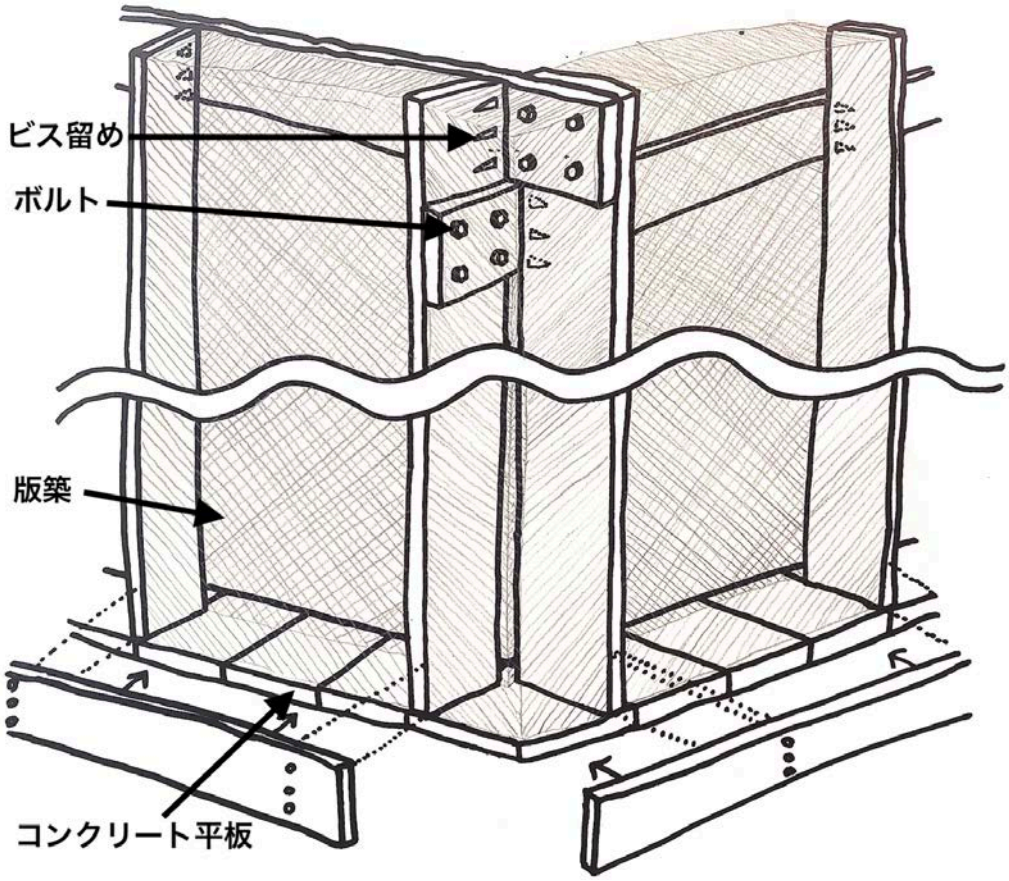
９時前に寝袋から出る。とてもシンプルな夢を見たのだけど、忘れてしまった。起きた瞬間に「シンプルだった」と、はっきり思ったことだけ覚えている。車内で日記を書くため発電所から電源を引こうとしたとき、陽はとっくに昇っているのにバッテリーが全く充電されていないことに気がつく。チャージコントローラーの、ソーラーパネル部分の表示が夜マークになっており、発電量を確認したら6V程度しかない。最初はソーラーパネルの故障を疑ったが、あれこれ試行錯誤しているうち、原因はパネルの角度であることが発覚した。木片を挟んで傾斜をつけた途端に20V以上に上がった。

10時半ごろから昨日の日記を書く作業をして、12時半に終了。そこから勉強堂の基礎となる平板を並べるための整地作業を始める。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日



いままで勉強堂でつくってきた構造物（発電所とトイレ）はすべて「ピンコロ」と呼ばれる、羽付きのコンクリートブロックを地面に埋めて柱を立て、そこを起点に構造を作っていた（いわゆる「布基礎」に近い）。

今回の本堂は、基礎部分は後の版築作業に向けて「面」にする必要がある（上から土を流し込んで叩くので、基礎はそれを面で支える必要がある）のだが、これまで作ったことのない版築の壁に屋根を支えさせるのは不安なので、構造としては木材を使う。とすると、木材向けの基礎と版築向けの基礎を両立させる必要がある。パワーコメリでずっと考えていたのはこの点だった。結論としては、平板を並べてその上に骨組みをつくり、地面への骨組みの固定方法については「あとで考える」という方法に落ち着いた（上図）。

今までのようにピンコロという「点」を埋めて基礎にするのではないとしたら、いわゆる「ベタ基礎的」なもの（荷重を面で支える基礎）を作る必要がある。必要がある、とか自信満々に書いているが、構造計算などはできないのですべて予想でしかない。「たぶん、この感じでやったら、いい感じに成り立つんじゃないか」くらいのもので、詳しい人が隣にいたら自信をなくす自信がある。自信をなくすことにたいして自信がある。ただ「版築と木造を数万円で両立させる構造についての専門家」はおそらく存在しない。私がするべきなのは、安全面に最大限配慮し、自分の想像力を疑いつつもこれまでの経験を信じることである。

他人から見ると大雑把すぎる営みかもしれないが、それが私にとっての「設計」だと言える。本当は購入する材料の数にも幅を持たせたいくらいだが、無慈悲なことに「材料の数は５～１０枚に決定！」なんてことはできず、「８枚」とか「５枚」とか、一つの数字を決定しなければモノというものは購入することができない。お金もないので多めに買うこともできない。この決定に時間がかかる。今回も二時間以上かかった。

＜とつぜんのコラムコーナー＞

版築の基礎を作り、骨組みをつくり、あとで骨組みを地面に固定する方法を考える、というところまでは決めたものの、その先の屋根や床のことまでは考えていない。考えていないけど工事は始めてしまうことにする。あまり未来のことが決定できない性格なのかもしれないけれど、たとえば現場の地面を均すのがものすごく大変で予想の１０倍かかる可能性とか、あるいはいま渋谷でやっている展覧会が終わったら無料の資材が手に入ってそれが使えるかもしれないという可能性とか、まとまったお金が急に入るかもしれない（そんな予定はないが０とは言えない）とか、未来に対する不確定要素を考慮し始めると、一手先はまだしも、二手先の事柄までもを”現在”の自分が決定することなど不可能なのではないかと思う。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

ものすごく資本があればむりやり想定通りに進めることはできるのだろうが、そんなものはないので、その場で手に入れられるものでやっていくしかない。思うに建築の設計はこういった不確定要素の大部分に目を瞑らないと進められないのではないか。いま大阪で進んでいる万博の工事や、東京オリンピックでの国の体たらくや、戦争を始めることを止められなかった大日本帝国も同じ構図で、未来にこれをやろうと決め、まずこれをやり、次にこれをやり、次のこれをやり→……→最後にこれをやって完成、という奇跡みたいな流れが「うまくいく」と関係者全員で信じきれなければ、着工ができない。そして関係者がふえるほど、一度始まったものを途中でやめることができない。さらに関係者が増えるほどに責任の所在が不明瞭になるので、状況が変わってプロジェクトが失敗する可能性が出てきて内心ではうまくいかないかもしれないと一人一人が感じはじめても、途中でやめることができない。みんなが信じているのに、お前は疑うのか！　という空気が失敗を後押しする。だんだん腹が立ってきた。現在計画したものが未来において当初の予定通り実現できると思い込むこと、またそれを思い込みとも思わずに商品（建築とか保険とかイベントとか）を設計することは、あまりにもお花畑すぎるのではないか。ここ３、４年だけでも新型のウイルスが突然現れて世界中は混乱したままにもかかわらず、ウクライナでは新たな戦争が始まりパレスチナでは虐殺が続き能登では大地震が起き福島第一原発では汚染水の漏出事故もあった。世界があまりにも不確定にすぎ、災厄はとても長いあいだ私たちに影響を与え続ける。これが年々長くなっている気がする。情報の共有がスマートフォンによって簡単になったおかげで一つの災いがどれだけ長いあいだ人を苦しめるのか、そしてそれがどれだけ世界中で起きているのかということが可視化されるようになった。終わりなき日常という言葉が一昔前流行っていたが実はとっくの昔から日常なんてものは存在しなかったのではないか。世界の人口を半分に割ったとき、不確定な出来事に影響を受けていない日常を長いこと過ごせている人の数の方が少数派なのではないか。とするとそういった非日常に放り出されている人たちが多数派の世界の中で、物事を過去の設計通りに進めていくことが当たり前であると考えるのは合理的ではないのではないか。いま練習するべきは精密な計画の立て方ではなく、思わぬことが起きても受け身が取れるからだ作りというか、状況に応じてその場で必要なものをこしらえていくブリコラージュ的な実践なのではないか。
計画が立てられない自分を正当化するためにあれこれ書いてしまった。要するに壁を立てる方法は決めたけどその先は決められませんでした、ということである。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

「ベタ基礎」なんてそれっぽいことを書いたけれど、やることは30cm×30cmの平板を、以前掘った穴のまわりに並べていくだけの作業である。ただし隣の板と段差ができないように、かつ水平になるように気をつけなければいけないので、それなりに時間はかかる。４辺の中で一番低いところからはじめた。土を盛るよりも減らす方が簡単だからである。まずある程度スコップとシャベルで土を均してから、以前ユンボ作業の際に出た土を継ぎ足しながら平板を置き、水平器を見ながら、木片をあてて平板をハンマーで強めに叩き沈めていく。できたら隣へ進む、という作業の繰り返し。これを４０枚分行う（一辺３.３m基礎ができる）。草が生えて地面がぼこぼこになっているところは根こそぎ掘り返し、根についた土もほぐして使いつつ、隣の平板に高さを合わせていく。こういう単純作業は嫌いじゃない。型枠を作って生コンを流し込めば勝手に水平になってくれるので楽なのかもしれないが、こちらのほうが性に合っている。

４枚終えたところで14時に中断。昨日からずっと車の上に積んでいた足場材を下ろしてからセブンへ昼ごはんを買いに。たらこパスタと野菜ジュース、レッドブルとグミ「忍者めし鋼」を買った。最近グミにハマっていて、いろいろな商品を開拓中である。

＜裏の滝口さん＞

お昼のあと作業を再開してしばらくしたところで「ご無沙汰ですね」と突然右から声がした。裏の滝口さんだった。「ご無沙汰してます」と挨拶し、しばらく東京で用事があってここに来られなかったことを話すと「東京はどちらにお住まいなの」と聞かれたので「つつじヶ丘、というかまぁ、調布の方です」と答える。

「調布、分かりますよ」

「そういえば、滝口さんも前回僕が来た時いらっしゃいませんでしたね」

「ああ、多分仕事だったんだね。私は仕事でよく1、2ヶ月いなくなるから」

この話は前も聞いて気になっていた。「差し支えなければどんなお仕事か聞いていいですか」と尋ねたら少し仕事のことを教えてくれた。

「滝口さんの家の隣、畑になってますね」とついでに気になっていたことを聞いてみると、「ここはもともと畑だけやってた土地なんですよ。でも冬は何もできないから」とのことだった。この畑が滝口さんのものなのかどうかはわからないが、畑のサイクルを滝口さんは知っていた。

勉強堂の向かいの畑についても、「あそこはもともとご本人のおうちが建ってたんですけど、５年ぐらい前に解体して今は別のところに住んでるんですよ」と教えてくれた。何を聞いても何かが返ってくる。

「ここ、穴掘ったんだね。何の穴なの」

「ここに小屋をつくるんですよ」

「皆さんで楽しくやる小屋ですか」

「まあ、僕が使う小屋ですね」

「すごいねえ何でも一人でできて……これもすごいなあ」

「それはまあ、倉庫ですね」

「これは何だろう」

「それはコンポストトイレです」

「ああトイレか。すごいすごい。……まあ怪我をしないように気をつけてくださいね」

すぐ隣に声をかけられる人が住んでいると思うだけでだいぶ違う。私は確かに一人で作業をしているが、完全に一人ではないのだと思える。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

平板を並べる作業の途中、うんこくさいポイントがあった。猫のしわざと思われる。それと以前ユンボで掘った勉強道本堂の穴のサイズを測ってみたら、四辺の長さがバラバラだった。それぞれ2490mm，2235mm，2410mm，2590mm。全部違う。当時はわりとかっちり正方形に掘れたつもりでいたのだけど。何が起きたのかわからない。とにかくこの穴はもうできてしまったのだから、これに合わせて本堂を作らなければならない。

＜作業中に聞いていた衝撃のポッドキャスト番組のコーナー＞

友人のアーティスト、マユンキキさんから、SNS上でアイヌに対する差別を扇動する投稿があったので札幌法務局に人権侵犯の被害を申し立てた、と聞いていたこともあり、D4Pのポッドキャスト第148回「SNS差別書込と公人の責任」を聞きながら作業をしていた。フォトジャーナリストの安田菜津紀さんが、中野区議の男から名指しで安田さんのルーツに関する差別的な書き込みをされたことを受けて、マユンさんと同じように法務局に人権救済申立てを行い、最近人権侵犯が認定されたことを報告する内容なのだが、その中で安田さんの代理人を務めていた弁護士の北村聡子さんが衝撃的な話をしていた。

この衝撃を受け止めるためには、前提として「各地の法務局に寄せられる申し立てのうち、ヘイトスピーチに関するものは、一度東京にある法務省人権擁護局というところに集約され、そこで人権侵害があったかどうかが認定されるということもあり、ものすごく時間がかかる。安田さんたちの場合は1年ちかくかかった」という事実を知っておく必要がある。SNS上の投稿が差別かどうかを認定するのに一年かかるという、この遅さがすでに衝撃であるが、私がもう笑っちゃうほどびっくりしたのは、投稿の削除要請についてである。

安田さんはSNS上に残っていた差別投稿の削除要請もしていたので、人権侵犯の認定がおりた以上、法務省がSNS側に削除を要請するということになった。いうまでもなく法務省は政府直属の威厳ありげな組織なので、北村さんや安田さんは、そんな組織がSNSの削除要請をやる以上、法務省のハンコがついた「特別送達」みたいな文書で、各プロバイダに郵便がいくのかと思っていたのだが、蓋を開けてみるとその実態は、投稿の下にある「通報」ボタンを法務局の職員がポチッと押す、というだけのものだった。やばすぎる。職員のひとたちが一年かけて差別であると認定した投稿を、法務省として削除を要請する方法が、Twitterをやっている人間なら誰でもできる「通報ボタンをポチ」は、あまりにも...あまりにも...である。

松の湯、サンピア

18時。15枚ほど並べ終えたところで道具を片付けて、クリーンセンターに入浴の予約電話をしてみたけどすでにいっぱいだったので「松の湯」へいった。相変わらず薄暗く、５ヶ月前にきた時から何も変わっていない。遠い星にいるような気持ちになる。初めは私と、マッサージ用具のようなもので頭をゴシゴシと洗っているおじいさんの２人しかいなかったが、途中で色黒の中年の男が入ってきた。その人は向かって右奥の隅に目をつぶって湯につかっていた。そこへおじいさんが立ち上がり「すみません」と彼に声をかけ、「足が悪いのでそこを使わせてもらえませんか」と、かなりへりくだった口調でお願いしていた。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

男の方ははじめそれに気がつかなかったのか、黙って目をつぶっているばかりだった。おじいさんが、すみません、そこを使いたいのですが、と再びお願いすると男はふんふんと鼻から息を吐きながら無言で少しだけ右の方にずれた。明らかに不機嫌そうで、空気がぴりついた。とても嫌な時間だった。とても嫌だったし、なぜか私も傷ついた。なぜ見知らぬ人に対して偉そうに接することができるのか理解できない。その先に何があるのか。何を求めて他人に対し、偉そうにするのか。おだやかに接した方が自分も気分がよいではないかと、考えるのはみなに共通の思考ではない、なんてことはもう大人なのでわかっているつもりだが、その、全ての人間に偉そうに接した最後の最後で彼は（例えば死の間際とかに）なにを見出すのか。

風呂から出て髪を車のエアコンで乾かしつつ、東金のサンピアという複合施設にあるサイゼリヤへ向かう。サンピア内の通路脇で高校生くらいの女の子が３人、卒業アルバムを広げて談笑していた。今日、卒業式があったのだろう。にこにこしちゃう。

晩御飯を食べて日記をまとめ、店を出て21時50分。イオンの食品売り場以外のすべての店が閉まっている。この時間になるとなかなか個性的なおばちゃんとかも、やはりいる。０時前に寝袋に入る。

車の窓から見上げる星空はいつも新鮮だ。

３月１５日

<とつぜんの夢日記コーナー>

建築製図の試験、それもかなり大事な試験がぜんぜんできないという夢を見た。他にも受験者はいたけど私だけ問題を解くのが異様に遅くて、全体で１時間半くらいの試験時間で残り30分になっても最初の３問しか終わっていないという有様で、試験中、私に話しかけてきた高校時代の同級生たちを冷たくあしらってしまった。同級生たちはでかいビニール袋の中に緩衝材のようなものを入れた、見るからにゴミ的なものを「これなにかに使える？　使えるでしょう、置いとくねー！」と言って机の上に置いていくので、「いるわけねえだろこんなもん」と相手に投げ返した。すると相手は「ひどくない？」と言って、なぜそれを渡そうとしたのかを説明してきて、それが多少納得のいく内容だったので、私は「それ本当？」と聞き、相手が「本当」と答え、「ならごめん」と謝った。ものすごく焦って問題を解いている真っ最中に突発的に目が覚めたので、瞬間「夢かーい」とツッコんでしまった。なぜ夢の中に出てくる人間は高校の同級生が多いのだろう。ここ数年の疑問である。

９時半に起き上がる。７時に起きたのに寝袋から出るまでに２時間半を要した。だがそれでいい。自分をコントロールできると思わないこと。コントロールできるのにしていない、自分はだめなやつだと思わないこと。

セブンイレブンへ行き、顔を洗ってそぼろご飯と海苔の味噌汁を食べる。10時半から昨日の日記のまとめ作業を始め、12時に終えた。

午後から作業を再開。平板が正方形なので、綺麗に並べていくだけでその場に正方形が現れてくる。そして１枚１枚と並んでいくごとに、以前自分が掘った穴がぜんぜん正方形じゃないことが露呈してくる（左図）。これだけずれが大きいと、むしろ面白くなってくる。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

汚れた胸の中には悲しい者や
邪悪な者がいるけど
扉をあけて奴らを追い出すことは
もう諦めてしまった
氷の中で出番を待ってるベビー
つぼみの中で春が近づくの
じっとまっている
者達 まだかな
咲くかな まだかな
（ゆらゆら帝国『待ち人』）

スコップで地面を掘り返していると、土の下で待機しているつくしの赤ちゃんを見つける。背の順で並び、地上に顔を出す順番待ちをしているみたいだ。

最近の世界情勢があまりにも暗く、希望などないのではないかと落ち込んでしまうこともあるが、こうして春を待っている者たちの存在が、感覚をぐっと今に引き戻してくれる。まだ春先なのに夏みたいに暖かい日が続くと「いまでこの暑さなら、夏は大変だろうなあ」とか「温暖化が心配だなあ」とか、わざわざ後ろ向きな思考をして自分を追い込んでしまう。もちろん気候危機のことを考えるのは大切だが、しかし暖かいということは、いまこの瞬間の私にとってはよいことのはずだ。「暖かくて、気持ちいいなあ」と思っていいはずだ。たまには素直に幸せを感じてもよいのではないか。私はつくしたちを掘り返してしまったが、彼らは地下茎でつながっている。春はそこら中の土の下で、顔を出すのを待っていて、私も同じように春を楽しみにしている。楽しみに思って、それでよい。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

とはいえ素朴なだけではいられないのが厄介で、みみず、ムカデの赤ちゃん、ハサミムシ、ダンゴムシ、蜘蛛、何かの幼虫…などが逃げまどう姿を目の当たりにしていると、どうしても植民地という言葉が頭にちらつく。このところアイヌへの差別問題やパレスチナの問題に毎日毎日触れているせいか、自分の行為をいちいち「恐れてしまう」癖がつきつつある。自分が日々生活をするだけで、どこかの誰かを傷つけている。そんな事実などとっくの昔から知っているつもりだったが、SNSによってその現実を画像や映像として見せられるのは、ただ「知っている」というだけとは比較にならないダメージを受けてしまう。ムカデでもなんでも、見つけたら傷つけないようにすくって遠くにポイしながら、できるだけ生き物は殺さないように気をつけながら作業をしても、どこかで見落としがあるのではないかという疑念は消えないし、植物は根を切らなければならない。

土が西日を反射している。情報の重さに負けないよう耐えている日々の中で、つくしの赤ちゃんや、この土の輝きは本当にありがたく思える。藤井一至さんの『大地の五億年』によれば、これは五億年前まで地球上に存在しなかったものだ。地球ができてから４１億年間、最初の植物が誕生するまでは存在しなかった、命が宿る場所が土だ。地球以外で存在が確認されている星もない。岩が砕かれ、砂や粘土となったものに、生物の遺体がまざりあい、できあがるまでに何千年もの時間がかかる奇跡の物質。『大地の五億年』を読んでから、明らかに土への見方が変わった。土をきっかけに、地球上の物質は循環するという事実を、生活の折々に意識できるようになってきた。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

再会

３２枚の平板を並べ終えて１７時半に「クリーンセンター入浴施設」へ向かった。ここで、とても嬉しいことがあった。体をかるく流してからいつものように露天風呂に行くと、浴槽の左隅に先客がいたので私は右のほうに寄って入った。すると先客のおじさんが

「だいぶ、日が長くなってきましたねえ」

と、話しかけてきた。瞬間、私は思い出した。この優しい声は間違いない。一年半前、ここに通いはじめたばかりの頃に「おはぎ」の話をしたおじさんに違いない。昔おふくろと暮らしてた頃は、お彼岸になるとあんこを炊いておはぎを作っていたけど、最近はもうあんこが商品として売ってるから、おはぎ作りも簡単になったねえという話をした、あのおじさんである。私は顔が笑顔になるのを抑えられなかった。

「そうですねえ。まだだいぶ明るいですねえ。あ、月が出てますね」

「ですねえ。ここ最近はあったかくていいですねえ」

「そうですねえ」

「でも来週からまた寒波が来るんですよねえ」

「え、そうなんですか」

「そうそう、日曜日、だから明後日からか」

「また寒くなるんですねえ」

「でもまあ、お彼岸もくるから、もうすぐ春ですよ。うれしいですねえ」

「ああ、お彼岸ですか。そうですねえ」

まさかまたお彼岸というワードが出るとは思わず、またおはぎの話が聞けるのではとわくわくしてしまったのだが自分から言い出す勇気が出ず、しばし無言の時間が流れた。でもこんなチャンス二度とないと思い、私は勇気を振り絞って「お彼岸といえば、おはぎが食べたいですねえ」と切り出してみた。おじさんは「ははは」と楽しそうに笑って、

「そうですねえ。でも昔から春はぼたもちで、秋のお彼岸におはぎ、でしたねえ」

「ああ、おはぎは秋ですね」

「私もね、昔おふくろと住んでたころ、お彼岸になるとおふくろに、おはぎ食べるかって言って、あんこを作ってましたよ」

またこの話をしてくれて、私は無性に嬉しかった。以前もお会いしましたね、と名乗ることも考えたが、なんとなく、初対面のつもりで話を聞いてみようと思った。

「いいですねえ」

「でもねえ、おはぎなんてのは食べてもらう相手がいないと」

「ああ、そうですねえ」

「ひとりじゃ作りませんねえ」

「おはぎはつくるの大変ですからねえ」

「それがね！最近はもう甘くしたあんこが売ってますから。あれを買えばいいんですよ」

「ああ、売ってますねえ」

「簡単ですよ。なんでも簡単になりましたねえ」

「そうですね。小豆を炊くのは時間がかかりますからね」

「あと、めんつゆ」

「ああ、売ってますよねえ」

「あれも昆布で出汁とってあるんですから」

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

「ははは。そうですね」
「なんでも簡単になりましたよ」
　ここで新たな客が私とおはぎのおじさんの間に入り、「ははは」と笑って会話に参加しはじめた。
３人目のおじさん（以下３）「このくらいの気候が、風呂入るにはちょうどいいねえ」
おはぎのおじさん（以下お）「そうですねえ」
わたし（以下わ）「そうですねえ」
お「一番星は見えないですね。昔は一番星みつけたって、喜んでました」
３「あんなところまで人がいける時代になったんだよなあ」
お「ねえ。すごい時代になりました」
わ「ふふふ」
お「かぐや姫が住んでたってねえ、昔は言いました。うさぎが餅ついてるとかねえ。本気で信じてたんですかねえ。半分くらいは信じてたんでしょうねえ」
わ「そうですねえ」
お「昔は進歩がありましたねえ。いまは進歩してるんですかねえ。退歩してますよねえ」
３「なんだって…あんなことすんのかねえ」
わ「いまはもう、希望があんまりないですよねえ」
３「ねえ、ずっと戦っててなあ」
さっきの「あんなこと」というのは戦争のことだったのかと、パレスチナのことなのか、ウクライナのことなのかはわからないが最近ニュースになっている情勢のことを、クリーンセンター入浴施設の露天風呂でも嘆いているひとがいる。
わ「ほんとですねえ」
お「.....わたしのところはね、今度の２４日に、お花見に行くんですよ」
３「ああ」
わ「いいですねえ。もう咲いてますか」
３「いや、まだだろう」
お「まだですね。でも２４日ですから」
わ「２４には咲いてますかねえ」
３「２４でもどうかねえ。どこに行くんですか」
お「大綱の、小中池っていうところです。池があるんですよ」
３「ああ、あったかもなあ」
わ「毎年そこに行くんですか？」
お「毎年行ってますねえ」
３「花見かあ、いいねえ。俺はもう何十年も行ってないなあ」
お「そうですか」
３「おれはもっぱら、たけのこだねえ」
お「たけのこですか」
わ「もう取れるんですねえ」
３「まあ、本格的に取れるのは４月に入ってからだけどね」
お「いま取ってるのは通ですねえ」
３「まああんまり伸びてないんだけどね。俺はもう２回行った」

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

お「たけのこねえ」

３「雨の後がいいんだよ。笹がね...」

お「雨後の筍ですか！」

　ここらで私はもうのぼせそうだったので「お先です」と会話を抜けた。

　いまの会話をできるだけ正確に記録しておかねばならないという使命感から、すみやかに体と頭を洗い、最速で風呂を出た。こことき、クリーンセンターではおなじみの刺青のおじさんが入れ違いに入ってきた。毎日来ているのかもしれない。

　車に戻り、４０分ほどかけて会話を書き記し、晩御飯を食べに「まんまや」へ向かったのだが、閉まっていた。のれんは出ていたのだけど軒先と看板にあかりが灯っていなくて、様子がおかしいなと思いつつ入ってみたら

「今日はお客さんが切れちゃったもんで、早めに閉めちゃって。仕込みに入っちゃって。申し訳ないです」

と大将。

「わざわざ来てくださったのに、本当に申し訳ないです。次はよかったら電話ください。電話番号分かります？」

大将は店のチラシをくれた。私が店を出るまで大将は「本当に申し訳ない」と、何度も何度も謝っていた。絶対にまた来ようと、明日の昼に来よう、と思った。

　セブンイレブンでバターチキンカレー（390円）と「揚げ鶏」と名付けられたホットスナックを買って駐車場で食べる。バイク好きらしい５～６人の兄ちゃんたちが、愛車の前でダベっている。その近くで別の若い男２人組が銀色の手すりに腰掛けてタバコを吸いながら、埼玉がどうのこうの、という話をしている。

　夜、寝る前に思い立ち「アジアンドキュメンタリーズ」で『オスロ・ダイアリー』という作品を観た。いまとなってはオスロ合意は打ち砕かれ、ガザは瓦礫の山になり虐殺が続いているが、かつてはたしかに希望があったことを知れた。シモン・ペレスの最後の言葉が刺さる。ラビン首相がいたたまれない。24時に寝袋に入る。

３月１６日　再会（２）

　９時４０分、起床。セブンイレブンへ行き、顔を洗って朝ごはんを手に入れ、１０時過ぎに戻ってきたら、現場の向かいの畑（滝口さんの家と反対側の土地）に車が停まっていた。週末だから畑の世話をしに来ているのだ。前回会ったときは夫妻で来ていたけど、今日は旦那さん一人だけだった。記憶の中の人物よりもずっと若い。ぜんぜんおじいさんではない。

　「お久しぶりです」と挨拶し、しばらく立ち話をした。私の作った駐車場を見て「たぶん駐車場じゃないかなあと思ってたんですよ」と言ってくれ、こんなアナーキーな見た目の駐車場でもちゃんと認識してくれるのかと嬉しくなった。オカガワさんという方らしい。ネギだと思っていた作物は玉ねぎだった。

「玉ねぎ、よく育ちそうですねえ」

「よく育ちますよお。あんまり立派じゃないけどね。そちらは何が建つんですか」

「いま小屋を作ってますね、DIYで」

「小屋ねえ。ここらは地盤が弱いからね」

「え、そうなんですか」

「うちもね、ここに家を建てたんですよ」

「はい」

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

「そしたらね、だんだんこっち（右）へ傾いちゃって」
「ほんとですか・・・え、もしかしてそれで取り壊したんですか」
「いや、それは引っ越しちゃったからだけど」
「なるほど。お近くですか」
「大綱のほう」
「大綱ですか」
「ちょっと遠いでしょう。車で40分くらい」
「そうですね」
「でも、もったいないからね、畑やってるけど、もういいかなと思ってるんだけど。邪魔なのよ」
「邪魔なんですか」
「おたく、買わない？」
「え」
「８０坪くらいあるよ」
「なるほど……ちょっと知り合いに、買いたい人がいないか聞いてみます」
「ここもね、坪五千円で話が来てるんだよ」
「そうなんですね」
「ただあそこの家の人がね、隣の土地を買ったって話を聞いたんだけど、坪三万っていうんだよ」
「えー！　高いですね」
「１万５千でも高いのにね」
「そうですね」
　まさかの「土地を買わないか」という提案に面食らってしまった。買いますと言いたいところだけど、私にこれ以上土地を買う余裕はない。**もし、この報告書を読んでいる方の中で、勉強堂の向かいの土地を買ってもいいという方がいたら、連絡をください。**
　コンポストトイレの説明もした。トイレを作っていると聞いたら近所の人は嫌がるかなと、ちょっと心配していたが、裏の滝口さんと同じくオカガワさんも全然気にしていない様子で、「トイレかあ。そうだよねえ、トイレがないとねえ」と、むしろ共感してくれた。
「トイレ行くとしたら、このへんだとコメリか」
「そうですね。あとセブンイレブンとか…あ、ここらで食品買う時って、どこに行ってましたか？　スーパーってありましたっけ」
「スーパーがね、ないんですよ」
「ないですよね」
「でもコメリの右の道をずっと行った山の上の方にありますね。昔は近くにあったんですけど、今は山の上にあります。歩くと…そうだな…５年ぐらいはかかるんじゃないかな」
「５年もかかりますか」
「歩くとね、５年かかるかもしれないですね」
と、オカガワさんは不思議な冗談を言った。私は真顔で受けとめた。
「しかしひとりで大変だねえ」
「はい、大変なことを始めてしまいました」
「でも楽しいでしょう」
「楽しいですね」

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.11**

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

「楽しいのが一番だからね。人は関係ないから。ここらの人は、何も言わないし」
「ほんと何も言わないですよねえ。裏の人とも時々お話しするんですけど」
「ああ、滝口さんね」
「そうそう、滝口さん」
「まあ仲良くしましょう」
「はい。よろしくお願いします」

オカガワさんとの立ち話のあと、昨日の日記をまとめる作業をして、１２時前に「まんまや」へ。ランチで来るのは初めてだった。他に二組七人の客。静かな店内。

さば定食。810円。

基礎の完成

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

１７時、基礎をすべて並び終えた。完成してみると、ユンボで掘った穴がいかに正方形になっていないかが一目瞭然となった（左図）。むしろ菱形に近い。

次回の作業のために足場板を1820mmで切り出し、雨に濡れないようにその他の資材や道具を片付け、暗くなる前に現場を出た。二日間の東京出張。

資材を雨に濡れないよう梱包する作業（左図）が毎度めんどくさすぎるので、はやく屋根付きのなにかを作りたい。本堂がそれになるのだろうが、壁が版築なのでまだ時間がかかる。思い切って、もうひとつ倉庫を作ってしまったほうがよいかもしれないとも思う。

だが私は作らないだろう。いくらもう一つ倉庫を作った方がいいと頭では分かっていても、私はこれからも毎回毎回、めんどくさいなあと思いながら資材を梱包するだろう。すくなくとも、本堂が完成するまではそういった「あったらちょっと便利」みたいなものをつくる気にはならないだろう。

＜とつぜんの、車を走らせながらぼんやり考えたことコーナー＞
お金がある時にしかできないことがあるのと同じように、お金がない時にしかできないことがある。そのときに固有の体があるから。お金がない時の体と、お金がある時の体は違う。同じように、悲しい時にしかできないことと、楽しい時にしかできないことがある。体調がよい時にしかできないこと、悪い時にしかできないこと、自分にはできると信じられる時にしかできないこと、自信がない時にしかできないことがある。なぜできないのかと落ち込むのではなく、そのときにできること、見える景色を肯定的にとらえること。いまの体を大事にすること。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

３月１９日

二日ぶりに現場に戻ってきたら、ユンボで掘り返した土の山を覆っていたブルーシートが風で剥がれていた。露わになった土の表面、あらゆる場所から、ものすごい数のつくしが生えてきていた。

さきほど「つくしは春を待っている」なんてのんきなことを書いてしまったが、この光景を見た時はその生命力の凄まじさにこわくなってしまった。この半年間、私が知らないあいだに彼らはブルーシートの下で黙々と根を広げ、ついに飛び出したのだ。

これはけっこう切実な問題である。私はこれから、この土を使って版築の壁を作ろうとしている。だが以前の報告書にも書いたように、版築に使う土はできるだけ有機物がすくないほうがよい。有機物が混ざっていると強度が落ちると言われている。そんな大事にすべき材料が、つくしの群れに侵食されてしまった。

これまで、私はずっと「侵略する側」の立場だった。草たちから多少の反撃（草刈りしたばかりなのにすぐ生えてくる草とか）をくらってはいたけど、自分の立場が脅かされるようなことはなかった。今回初めて、侵略される側の立場になった。彼らは本気なのだ。「かわいいねえ」「すごいねえ」みたいな態度で油断していると、飲みこまれる。生存をかけた争いが常に起きているということを、改めて認識する必要がある。気を引き締めていかなければならない。（メモ：「崇高さ」とは、「安全な場所」から大自然を眺めたときに感じるものだ、というようなことをカントが言っているらしい）

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

本堂の骨組みに使う木材の塗装作業を行った。版築の中で土に触れて、あるいは雨に濡れて木材が腐らないように、前回コメリで買っておいた「木部保護塗料（メープルカラー）」（右図）をローラーで二度塗りした。

夜は「まんまや」でロースカツ定食（1550円）を食べた。店を出るとき、お店のご夫妻がそろって「まいど！」と言ってくれたのがうれしかった。あの「すてきなお帽子」を被ってないのに、私のことを認識してくれている。

本当は「まつした」というお店で食べてみようかと思い、前を通ってみるところまでは行ったのだけど、前に来てみたときと同じく、地元のおじさんらしきひとたちがひとつのテーブルを囲んで、何やら真剣に話し合っている以外はすべて空席で、ここに突入していく勇気は私にはなかった。このお店、調べてみたら山武市の市長さんの家族？が経営しているらしい。いつか行ってみたい。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

３月２０日

風がものすごく強い。車が揺すられる程の強さ。一度吹いた風は戻らず、つなぎとめることもできない。水は高いところから低いところへ落ちても水として形の形を保っているが、風は吹き終わってしまえば消えてしまう。動きのなかにのみ存在する。どうも、全般的にやる気が出ない。風はやる気をそぐ効果があるらしい。とりあえず顔を洗うためにコンビニへ行く。コンビニの駐車場は落ち着く。人がいるところが見える。人が見えないのはさみしい。コンビニからの帰り、電信柱に背中をぴったりくっつけて道路をじっと眺めているおばちゃんがいた。目が合った。

インターネットで購入した中古のインバーターを発電所に設置した（左図）。インバーターというのは、自動車用バッテリーから供給される電力（12V）を一般家庭用の100Vに上げる機械のことである。

１万円は決して安くはないが、以前使っていたインバーターは最大出力が200Wしかなかったので、マキタのバッテリーの充電がよく止まってしまっていた。これで電力事情も改善されるだろう。

午後、本堂の骨組みの作り方について絵を描いているうちに、どう考えても材料が足りないことが徐々に発覚し、パワーコメリへ向かった。考えるほど、過去の自分はいったいなにを思って「これで足りる」と思っていたのかわからなくなった。あれでどうにかなると思っていた自分が信じられない。こんなことばかりである。パワーコメリで杉の破風板（24mm ×150mm ×4000mm）を10枚と、ボルト、ナット、ワッシャーを50セットと、追加の木材保護塗料を買い、現場でその一部をカットしてこの日の作業は終わり。

＜夜、「松の湯」でのこと＞

いつも通り寡黙な番台のおじさんに500円を払う。服を脱いでいると番台の正面に据え付けられているテレビから、中国で、とあるメーカーのミネラルウォーターの不買運動が起こっているというニュースが聞こえてくる。市民が声を荒げて販売元のメーカーを罵倒する声。この水は中国で作られたものだが、ボトルのキャップが赤色で、日本の国旗に似ていることから創業者は日本びいきだと勘違いした人が不買運動に走っている、ということらしい。なぜわざわざこんなことを取り上げるのだろう、不愉快な気分になりそうだったのであわてて風呂場に入ったが、湯船に浸かっているあいだもずっとひっかかっていた。中国人という雑なくくりによって個を消したうえで、視聴者を煽るような内容を、しかも中途半端に報道する。人間の脳は自分と離れた集団のことをどうしても雑なくくりで捉えてしまう癖があるのだから、せめてテレビくらいはそこをケアするような仕方で番組をつくってもらいたいのだけど、こんな有様では日本に住んでいる中国籍の人たちが理不尽なことを言われたり、場合によっては危険な目にあったりしてしまう。視聴者の反・中国感情を煽るような内容だったので私はその場から退散した。すこし前まではこれでよかった。嫌な場所から自分が逃げれば、自分をケアすることができた。でもいまはもうすこし違う感覚に変わっている気がする。私ひとりがその場から退散しても、番台のおじさんはテレビを見続けている。番台のおじさんの感情がこの雑な番組に刺激されるところを想像すると、いたたまれない気持ちになる。番台のおじさんが、バカな番組だな、と間に受けないだけの、あるいは「なんでこんなことを報道するんだろう」と疑問を持ってくれますようにと心から願った。いま調べたら、このメーカーの創業者は中国一の富豪らしく、失業率が上がっている中国では一部の人々がなんでもいいから怒りをぶちまける矛先を探していて、いわばガス抜き的に不買運動が起きているのではないかという記事を見つけた。

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

美しい海老あんかけチャーハン

松の湯のあと、東金市内にある「大陸」という、創業40年以上らしい老舗中華料理屋へ。海老あんかけチャーハン1050円。

夜、車内で寝る準備をしているとき、ソーラー発電所からの電力を初めて車内の携帯用ライトに繋げてみた。なにかが満たされていくような気がして「なんかうきうきしちゃう」と思わず携帯にメモした。工具のバッテリーや携帯を充電するより、灯りがともることのほうが、太陽光発電がもたらす充実感は大きい。日中に蓄えた太陽エネルギーを暗くなってから使っている、ということの幸福感。地球に優しいからとかいった道徳的な理由ではなく、再生可能エネルギーのほうが幸せな気分になる、という側面をもっと考えてもよいと思った。

３月２１日

朝５時に目が覚める。夜明けの空を見る。とても久しぶりに見た、と感じた。空の低いところの光の帯もきれいだけど、その少し上から、高いところにかけての色の移り変わりにみとれてしまう。深い湖のほとりを眺めているような。この深さの先には夜があるというところも湖に似ている。

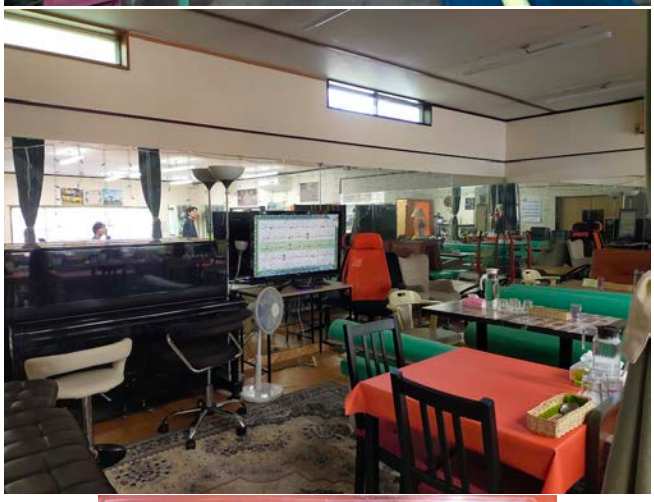
基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

朝から、昨日買った木材をカット（3300mmを８本、3348mmを２本）して、保護塗料を塗りおわったころにちょうど柏瀬くんと齋藤くんという二人組が到着。今日一日、作業を手伝ってくれる。骨組み作りは一人だと厳しいのでとても助かる。この二人が来るタイミングに合わせていろいろと準備してきた。

もうお昼だったので、まず昼ごはんを食べに行くことにした。「AARIUS」という、日向ではお馴染みのハラルフードレストラン。店内も軒先もパキスタン国旗のグリーンが綺麗な、清潔でしゃれた店。隣には食材屋もある。



基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

「断食が始まっちゃってるので、ないものもあるんだけど…」と、お店のオーナーっぽい男性（ムスリムの衣服（ガラベイヤ）を着ている）から説明を受ける。そういえばパレスチナ関連のニュースで、断食が始まったが結局停戦はなされていないという暗いニュースを聞いていた。ちょっと申し訳ないタイミングで来てしまったなと思いつつ、しかし説明を聞いていると実際ほとんどのメニューが可能だった。出せないのは一部なのだけど、そのことについて心底申し訳なさそうにしていて、なんて優しい人だと思った。ジンジャービアーという、スリランカでは人気のジュースをサービスまでしてくれた。私は「PAYA　パヤ」と呼ばれている、脚肉のスープカレーを頼んだ（前ページ右下）。スープの部分はおいしく食べ切ったのだけど肉の脂身が多く、そこは食べられなかった。柏瀬くんはビリヤニ（下図）を頼んでいた。

お会計のとき、断食はいつまでですかと聞いてみたら４月１１日くらいまで、とのこと。明けたらもう一度来たい。

骨組みをつくる

齋藤弐希くん
と
柏瀬克也くん

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.11**

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

（上記、一部の写真は柏瀬くん撮影）

作業中、タイムラプス撮影していたGoProを現場に置き忘れてきたので、組み上がっていく写真を見せられないのが歯がゆいのだが、お昼過ぎから組み立て始め、17時半には完成した。板材が面で接するところはボルトとナットで固定し、そのほかの接合面はすべてビス打ちとした。私にしては珍しく、基礎（3300mm×3300mm）のサイズにぴったり合わせて組み上げることができた。なかなか、かっこいい。

ただし、いまは骨組みが基礎の上に載っているだけの状態である。かなり思いので風で吹き飛ぶことはないだろうが、この先施工中にずれてしまう可能性はあるので、次回はこの骨組みを地面に固定する方法を考えたい。

文責：村上慧

基礎並べ、一年半ぶりの再会、本堂の骨組み作り

作成者：村上 慧

2024年3月31日

＜作業後のぼやきコーナー＞

作業を終えて、18時ごろに柏瀬くんたちを見送り、「みきの湯」へ。今回の滞在で目標にしていた骨組み作りは終えたので、ゆっくり風呂にでも浸かろうと思ったのだが、露天風呂のテレビでMLBを30分くらい見てしまった。あまり休めなかった。普段野球なんてぜんぜんみないのに、テレビでやっていたらみてしまう。みきの湯にはMANGAもある。時間が潰せる。暇をおそれる気持ちに飲みこまれてしまったら、ここにいつまででもいられそうだ。テレビは見てしまうけれど、のまれたくない。この感覚はどこからくるのか。スポーツ中継は不愉快なトーク番組とは違ってみていられる。なのに説明できない強いエネルギーが自分の中に湧き起こり、試合への没入を阻害してくる。30分をすぎたころに自分のなかでなにかがはじけ、ゲームの成り行きがものすごーく気になりつつ、風呂から出た。いつまでもテレビを見るな、と親に言われるような子供でもなかったはず。誰に教わったわけでもないのに、いつまでもテレビを見ているのはダメだという気持ちはどこから来るのか。漫画もあるていどはずっと読んでいられる。ゲームも自分に合うものなら何時間でもできるし、朝から晩までゲームをやる日が何日も続くということもある。最近もあった。ゲームや漫画に徹底的に没入し、どこかで限界が来る、ということを繰り返す人生。お金が無限にあっても一年中ゲームをすることはないだろう。ある段階で、暇にならないとだめだ、なにかつくらないとだめだ、という気持ちに苛まれる。「暇」と「制作」は精神的に繋がる部分がある。この、「暇」へと向う精神的な方向づけはいつから自分の中にあるのか。わからない。

今回みきの湯で何度かテレビを見て思ったのは、その場の生をやりすごすためだけの、いわば情報のシャワーみたいなものだということ。あびている間は心地よいが、お湯が止まると寒い。寒いからずっとあびてしまう。

おまけ

現場の隣りの空き地にllll不自然な四を見つけた。ここだけ草に葉がついていない。枯葉剤かなにかがまかれていた影響も考えたけど、田んぼだったらしいのでその可能性は低い。なんだこの四角形は。